In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University marge to Osaka Metropolitan University

Title	「着」「了」について
Author	高倉, 克己
Citation	人文研究. 6 巻 6 号, p.367-376.
Issue Date	1955
ISSN	0491-3329
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学文学会
Description	

Placed on: Osaka City University Repository

Osaka Metropolitan University

「着」「了」について

高倉克己

◇「着」「了」の用法に対する疑問

呂叔湘・朱徳熙両氏の語法修辞講話第三講虚字第五段「着、了」の項に、「着」は行為の持続を表わすと云い、「了」は行為の終結を表わすと云つてある。

更に「着」については、持続性のない行為には「着」を用いることはできないし（例えば「進屋子」の「進」の如き、）動詞自身に持続の意味のあるものも「着」を用いるに及ばない（例えば「愛」「恨」「害怕」などの如き）と云つてあるが、その後で云う、

総之、只有可持続可不持続的行為、才需要用「着」字表示持続。而且不是毎逢持続的行為就一定非加「着」不可。如果你不要強調這個持続性、也就不必加「着」。

この「而且…」以下のことばは注意を要する。

「了」についても、行為の終結を表わすのであるから、急速に終結しないような行為には「了」をつけない云々と説明があり、最後に

総結一句話、「着」和「了」、非必要的時候不要用。現在這両個字都用的太濫、尤其是「着」字。毛主席在八千多字的「論人民民主専政」裏只用了四個「着」字、可是有一篇文章裡、不到一千五百字的一段就用了十六個「着」字、其中

只有四個是需要的。「了」字因為本来有点弾性、往往可以不用也可以用、所以還不太刺耳、不過也応該精簡些。

こゝに「必要な時でなければ用いてはならない」とあるが、その「必要な時」とはどういう場合か、それは客観的な基準があつて、それによつて決定できるものなのかどうか。前の「着」についての項に『その持続性を強調しようとしないならば、「着」をつけなくてもよい』とあるが、その持続性を強調するか、しないかを決定するのは、話しをする当事者自からであることは言うまでもない。「了」についても「これは本来弾力性があるから、往々用いても用いなくてもよいことがある」と言つている。もしこれが句末につく語気詞と呼ばれる「了」についてならば、用いても用いなくてもよい場合があることは考えられるが、動詞の後について行為の終結を表わすと云われる「了」がこのように弾力性があつては混乱が起りはしないかと心配される。

更に又、呂・朱両氏の語法修辞正誤練習、虚字、五、着、了の項には

関於「着」和「了」、首先応該問、「這裏有沒有需要」、「語法修辞講話」裏面指出一些不能用「着」和不能用「了」的情況、下面解答中也指出一些同類的情況、但是光從這方面来考慮還不够。無需要的「着」和「了」一般習慣是不用的。

とある。この終りのことば、『だがただこの方面からのみ考えたのでは十分ではない、不必要な「着」や「了」は一般の習慣で用いないものなのだ』というのは、何か突き離されたような感じがする。中国語の「一般の習慣」を知らない外国人にとつては、全くどうしてよいかわからなくなる。

「着」や「了」についての大体の法則は、各語法書にも述べられているので、それだけ読んでいれば何も問題はないようなものの、いざ実際に文章を書いたり、読んだりする時に語法書の説明だけでは解決できないことが時々起つてくる。精密に読んだり書いたりする者にとつては、これは大きな悩みである。今こゝに、この問題を解くことはできないけれども、せめて何故にこのように語法書の説明だけで解けない問題が起つてくるかについてでも考えてみたい。

◇「着」の用例

先ず「着」について、語法修辞講話は云う。行為の中で持続性のあるものには動詞の後に「着」をつけて、その行為が持続していることを表わす、しかし、持続している行為には、いつも必ず「着」をつけなければならないのではない。もしその持続性を強調しようとしないならば「着」をつけなくてよい。この説明によれば、持続性のない行為には「着」をつけてはならないので、これは絶対的なものである。しかし一つの行為に持続性があるかないかについては、それが具体的な動きを見せるものであれば（「進」「死」の如く）明かにそれとわかるが、抽象的な行為を表わすものであるとそれほど明瞭でない場合がある。

語法修辞講話に誤用の例としてあげてある「採取着」「表現着」などの「採取」「表現」などのことばは、具体的にある物を手でとること、ある物を目に見えるように表わすことでもあるが、

対婚姻法的貫徹執行、部分幹部採取着漠不関心的態度。

這一勘査団的組織工作、使充分的表現着這種新的方向与新的作風。

のように用いられてくると、「採取」されるものは「漠不関心的態度」であり、「表現」されるものは「這種新的方向与新的作風」であつて、具体的な物ではなくなつてくる、そこで「採取」「表現」の具体性もうすらいでくる。その行為が持続的なものか、一時的なものかの区別が明かでなくなる、ここに混乱の起る原因があると思われる。

更に次のような例について考えてみる。

「我們該歇一歇了吧？」小紅臉不大的声音提議着。（蕭軍、八月的郷村）

「領隊」的話並不被誰怎様注意着（同上）

隠約還可以看見那個独立而不甚高大、有些乳頭形的山峯——在那裏被擊斃了両個弟兄、眼見着敵人割了脳袋！（同上）

蕭軍の文章には、「着」に限らず虚字の多いのが目立つているが、「着」は特に多い。ところでこの「提議着」、「注意着」「眼見着」などの「着」はどうにも落着かない、これは「提議了」「注意了」（この方は少しおかしいが）「眼見」とありそうな所である、それを蕭軍は何故、わざわざ「着」をつけたのであろうか。普通なら「了」をつけるか、何もつけずにおくかする所に「着」をつけたのは、ここで特に行為の持続性を強調しようとしたものとは考えられない。何かほかに理由がありはしないだろうか。

このことは、語法修辞講話に挙げてある

街的両旁也有着各種各様的店鋪。

の「有着」についてみても、「有」という動詞は存在を表わしているのだから、これに「着」をつけて存在の持続を表わそうというのは無意味であるということは誰にもわかりそうなものである。それだのに今ではこの有着という形が「已経満天飛了」と云うほどに多く用いられるというのは何故であろうか。

ここで「着」のいろいろの使用例についてその句中ではたす役割をもう少し考えてみる必要がある。「行為の持続を表わす」ということだけで総ての場合に説明できるかどうか。

いかにも動詞の後に「着」がついて行為の持続を表わす例は極めて多く、これが「着」の本来の使命であるかとも思われるが、一方また日常の会話に用いられる、

快着点児、慢着点児、大着点児、

などから、更に又、

……瘋哥、儞把東西交給娘子、去作聯絡員、来回的跑着点。（老舎、龍鬚溝、六一頁、人民文学出版社版）

……就対付着点吧！儞受点委屈、将就将就他、……（同上六四頁）

更に又、「怎麼着」「這麼着」などと用いられているものはどうなるのであろうか。これらはもう行為の持続では解けな

い。ここで想い起すのは、前にあげた語法修辞講話の「もし持続性を強調しようとしないなら、「着」を用いなくてもよい」ということばである。行為の持続を表わすのが「着」の使命であるならば、何故に、話者が強調しようとしまいと、行為の持続に対しては例外なく「着」をつけることをしないのであろうか。ここに何か問題があるようである。つまり「着」をつけるかどうかの基準は、行為の持続かどうかという点だけでなく、それを強調しようという話者の主観がはたらくかどうかにもあると考えるべきである。更に行為の持続ということが、前に述べたように具体的にはつきりしないようなことばについて、そのことばの意味をじつとそのまま定着させようという気持から、「着」をつけていう、この定着させようという気持、これは「着」の本当の意味かも知れない、そこから行為を定着させた行為の持続ともなれば、意味を定着させた強調ともなる。行為をそのままの状態に定着させるはたらき、それは行為を動きとしてでなく、状態として表わすことにもなる。「着」にはこれらのいろいろなはたらきが含まれているが、その根本は定着させる点にある。だから、「有」のように、「着」をつける必要のないものに対しても「有」だけでは何か物足りない感じを抱いた場合に、わざと「着」をつけてその意味を定着させようとするのである。「有」だけで物足りない感じを抱くというのはどういう訳か、「有」が具体的な物の存在を表わす場合には、眼前にその事物があるから問題はないが、抽象的なことがらの存在となると少しちがつてくる、「有」の意味がそれだけ抽象化、概念化されてくる、これは誰でも物足りなさを感ずるものである。眼前に見た物を最も確かなりと考える中国人の心理からすれば尚更であろう。（この心理が老舎・竜鬚溝の王大媽に、什麼事児呀、都是眼見為真と云わせるのである。七四頁）そこで存在を云い表わすのに「有」だけでは物足りない、不安である、「着」をつけて「有」を定着させてこの物足りなさを補おうとする。だから「有着」の用いられている例について見ても、前にあげた、「街的両旁也有着各種各様的店鋪」のように具体的な物の存在を表わす場合は少くて、多くは次のように抽象的なものについてである。

在学習上他們有着積極克服困難的精神。（語法修辞講話一一〇頁）

「着」「了」について

土改是有着偉大的意義。（朱德熙氏、作文指導一一六頁）

太陽已経完全没有了、在畳山的後面、有着很濃黒的晩雲開始発動。（蕭軍、八月的鄉村五頁）

「有着」に限らず、「採取着」「表現着」などが出てくるのも同じ心理からであろうと思われる。「着」が命令文によく用いられる（前にあげた例）のも結局はことばの意味を定着させて、強調して相手に忘れさせまいとする意志の表われであり、命令要求というほど強くなくて、好意的に勧める場合には別の云い方をする。例えば、

小妞「我打水去！」

四嫂「儞歇着吧！那麼遠、満是泥、儞就行啦？」（龍鬚溝、六頁）

娘の小妞が水汲みに行くというのを、母親の四嫂がお前なんかじっとしてな！　と押えつける調子が你歇着吧！　によって表わされる。これに反して、

四嫂「我謝謝您啦！您坐這児歇歇吧！」（同上一二頁）

これは四嫂が、自分の子供たちの就職の世話をしようとしている劉巡長に愛嬌をふりまいている所であるから、同じ「歇」を使っても「歇歇吧！」とやわらかい口調で云っている。こうした現象は命令文には限らない、ほかの文章でも、「着」のあるなしで微妙な意味の差が表現されている、老舎の「面子問題」から少し例をあげて見よう（太田・鳥居両氏の註解中国叢書による）。

周明遠書記「我是書記、不管收発信件！」

佟景銘秘書「儞是書記？書記難道就不伺候着秘書？」（四頁）

佟「身分、地位！我是秘書、他応当伺候着我、難道我還不如老百姓？」（一〇頁）

これらの「着」は、「伺候」という行為の持続を表わすというよりは、何か「伺候」という行為を特に印象づけようとするような感じを持っている。だから秦医官が佟秘書に云うことばの方は、

「秘書、倆到底是有病没有？我有我的工作、不能老伺候倆一個人！」（一一頁）

となつて、「伺候」に「着」はついていない、「老」の字があるにもかかわらず。更に又、

佟秘書「倆可是告訴我要緊張着点！　那個姓周的書記還説過、我的地位――」

于科長「一個書記的話、聴牠幹嗎？至於我説緊張點、不過是大家都那様、咱們也不能不隨着、没有一点別的意思！」（五六頁）

この対話について見るに、佟秘書のことばは、「緊張着点」とあり、于科長の方は「着」がついていない。これも明かに強調しているか否かという語気の相違によるものである。「お前はわしに張り切つてやれと云つたな」というのに対して「わたくしが張り切つてと申しましたのも」と云つた調子である。こう考えてくると、竜髭溝の次の例なども同じく語気の問題と見るべきであろう。

二春「媽、您老這麼不講理、我可馬上就結婚、不伺候着您了。」（六一頁）

娘の二春が、わからずやの母親に向つて、「あなたのお世話なんかしませんよ」という強い態度を表明しているのである。

又、「面子問題」の中の

佟継芬小姐「頂可怕的夢！　一嚇就嚇醒、手心上出着涼汗！」（三一頁）

この「出着」は異様ではなかろうか、「出了」とあるのが普通であるように思われる、それをわざわざ「着」をつけたものとすれば、（前にあげた蕭軍の文にも「提議着」→「提議了」があつた―三・四頁）、これは「了」という助動詞に何か物足りなさを感じて、「着」を用いたものと考えることはどうであろう。「了」に物足りなさを感ずるというのは、「了」はことばを言い終つてしまうと、そのことばが自分から離れて行く感じがある。「了」をつけることによつてそのことばと自分との間に距離ができるのである（これについては後に述べる）。ことばというものは、使いなれていると段々にその実感がうすらいで、次々といつそう強いことばを使うようになる。朱徳熙氏の「作文指導」に

現在似乎有一種趨勢、就是不願意単用動詞、不是在前面加「是」、就是在後面加「了」或「着」、有時「雙管斉下」。（一一五頁）

といつているのは単音詞から複音詞を用いるようになつた白話が、それだけでまだ物足らず、「是」「了」「着」などをつけるようになつた現象をいつたものと思われるが、現代人の語感は、更に「了」にも物足りなさを感じて「着」によつてこれを補い、特に印象的な表現をしようとしているのであろう。「語法修辞講話」に、

現在這両個字（了と着をさす）用的太濫、尤其是「着」字。（一一五頁）

とあるのはこれを指すものと思う。

「着」の用法に以上のように種々なものがあり、普通の語法書の説明だけでは解ききれないということは、「着」のようなことばを十分に解明するためには、今までの語法の考え方をもつと別の角度からも考えなおしてみる必要があるということにはならないであろうか。「着」の種々の用例をあげて、その心理的な跡付けを試みたのは、こうした用例を正しいと認めようとする理由づけではない。正用か誤用かは我々外国人からは云う資格はないのである。ただこのような用例が表れてきているということは、動詞―或は述語部分の構成法と云うべきか――の表現に変化が起つていることを示すものである。

◇「了」の用例

「了」についても、「語法修辞講話」に、「行為の終結を表わす、大多数の行為は何れも終結するものであるから、「了」をつけられない動詞はごく少ない。」（一一一頁）とあるが、「了」をつけられる動詞には終結を表わす場合に必ず「了」がつくかというと、そうとは限らない。「了」の用法は句末につく語気詞と呼ばれるものを除いて、動詞の後につく完成貌（王力氏）とか既事相（宮叔湘氏）とか呼ばれるものだけについて見ても誠に「霊活」である。客観的な基準はあるものの、それだけでは律しきれない何ものかがある。老舎の四世同堂の中から例をあげて見よう。最初の書き出しの所、

祁老太爺什麼也不怕、只怕慶不了八十大寿。在他的壯年、他親眼看見八国聯軍怎様攻進北京城。後来、他看見了清朝的皇帝怎様退位、和接続不断的内戦；……

もう一つ別の例、

在当初、祁老人選購房子的時候、房子的地位決定了他的去取。他愛這個地方。……所以、他決定買下那所房。（一〇―一一頁）

前の二つの「看見」後の二つの「決定」、どちらも皆「了」をつける理由があるように思われる。テンスとかアスペクトとかから論じた場合に、一方にだけ「了」がつき、一方にはつかない理由は見あたらない。だが実際は「了」は一方にだけしかついていない。これは「語法修辞講話」のいうように、

「了」字本来有点弾性、往往可以不用也可以用…。（一一五頁）

というものであろうか。「了」の有る無しによつて意味のはつきりちがふもの（有と有了、吃飯了と吃了飯了の如く）はよいが、ここにあげたようなのは、「了」があつてもなくても意味の上に変りはない。このような「了」はどういう役目をはたしているのだろうか。

前の例、「看見」について、祁老太爺の見たのは、八国聯軍にせよ清朝皇帝……にせよ、何れも過ぎ去つたことで、「看見」という行為はとうに終結している。（「看見」は「看」た結果「見える」という意味であつて、「看る」という動作そのものの表現ではなく、その結果について述べることばであることにも注意する必要がある。）そこで、こゝに「了」をつけるか、つけないかの基準はどこにあるかと考えてみるに、一方は「在他的壯年、他親眼看見……」とあるのに対し、他方は「後来、他看見了……」となつていて、語気がちがうことに気がつく。この「親眼」が前にあつて「看見」は、直接この目で見たということで、直接経験としてそのまま、眼前にある真実として存しているというような心持が表現される、「看見」はここではそのまゝ目の前にあるような表現として用いられている。後の方は、そんな語気はなく、ただ普通にこういう状景を目にしたという淡々たる表現で、緩かである。してみると「親眼」というような「直接こ

の目で眼前に」という心持と「了」とは相容れないものがあると考えられる。

「什麼事兒呀、都是眼見為真。」（老舎・龍鬚溝、王大媽のことば、七四頁）このような意識の強い中国人の心持として、「親眼看見」は絶対的な真実である。だから動詞そのまゝで、言いきつている、（こういうのを動詞のはだか表現と呼びたい、）魯迅の「孔乙己」には

「什麼清白？我前天親眼見偷了何家的書、弔着打」。

とある。おとといのことでも、「親眼見」とそのままの、はだか表現で、「了」はついていない。「親眼」は、だから「看着」を後に続けることはある。

可是一個将近六十歳的老漢、把他親眼看着長大了的年軽後生硬叫成「先生」也有点不好意思。（趙樹理、李家莊的変遷）

話をもどして、前にあげた「四世同堂」のもう一の例「決定」と「了」との関係を考える。「房子的地位決定了他的去取。」と「所以他決定買下那所房。」との間にも、やはり語気のちがいが目につく。「房子的地位決定了！」という擬人的な表現、それは「決定」という行為そのものの直接的な表現ではない。それに対して「所以他決定…」の方は祁老人の「決定」する行為をそのまゝに、あたかも眼前に見えるように表現している。語気の点から云えば、「了」が入つたのは緩、入らないのは急である。英文典にいう歴史的現在の表現を思わせるものがある。「了」が入ると否とで意味に変りがない場合に用いられている「了」は、テンスやアスペクトで説明するよりも、もつと主観的な見方に立つて語気に関するものとして解する方がよくはないか、そうすると句末につく「語気詞」の「了」とのつながりが当然考えられて来る。「了」の示す語気が緩だと云つたが、もつと、つつこんで云えば、「了」をつけることによつて、そのことばが自分から離れて行く、疎遠になる、従つて力が弱まり、頼りなさを感ずることにもなる。「了」の使用が大変多くなつてきているものの一方では又、「着」が多く使われだしたのは、何か現代人のこうしたことばの感覚の移り変りによるものではなかろうか。